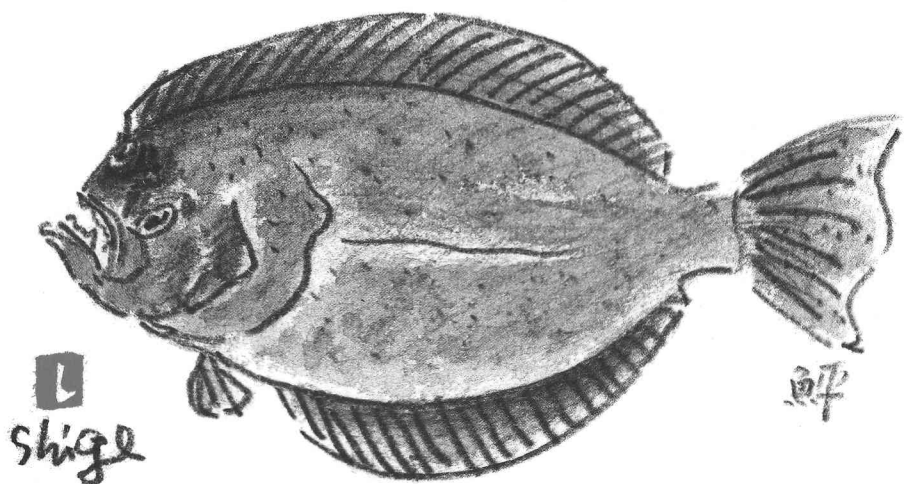


季刊 連句 第3号



南 柏 雜 記 1

一 日 が かり ・ 連 句 に 就 て の 断 章 (三) 草 間 時 彦 2

一 座 の 興 東 明 雅 5

老 松 △ 三 吟 歌 仙 ▽ 明 雅 ・ 杜 藻 ・ 時 彦 10

「 絶 頂 の 城 」 付 勝 練 習 歌 仙 12

芭 蕉 翁 参 百 回 忌 取 越 し 追 善 歌 仙 興 行 14

昭 和 枯 尾 花 東 明 雅 14

枯 野 (文) 捌 ・ 東 明 雅 捌 ・ 杉 江 杉 亭 17

枯 野 (文) 捌 ・ 馬 場 東 夷 捌 ・ 雜 賀 遊 18

枯 野 (文) 捌 ・ 坂 本 孝 子 捌 ・ 山 口 み づ ゑ 19

枯 野 (文) 捌 ・ 吉 沢 て る よ 捌 ・ 市 野 沢 弘 子 20

武 翁 賞 季 刊 「 連 句 」 書 評 9 ・ 13

雁 帛 往 来 21

南 柏 雜 記 1

芙蓉のはなのらくとちる 史邦

吸物は先出来されしすゑんじ 芭蕉

猿蓑「鳶の羽」の巻にある右の付合を読むたびに、このすゑんじ（水前寺）が気にかかっていた。私の郷里は熊本で、少年のころ何度も水前寺には遊びに行ったが、もちろん、猿蓑のこの句も知らず、水前寺のりにも関心はなかった。その頃は熊本で水前寺のりなど売っていなかつたのである。九月、久しぶりで郷里に墓参に帰った時、思

い立って水前寺公園を訪ねてみた。郷関を出てから既に五十年、郷里と云っても変り果てて、知人も殆んど居ないのに、水前寺だけは昔とちつとも変らず、迎えてくれたのは嬉しかった。滾々と湧き出す清水、悠々と泳ぐ鯉や鮎、すべてが少年の日のままであるのは涙が出る程懐しかった。水前寺のりも園内の茶店で売って居た。立派な箱に入っているが、内容は黒いラシヤ紙のようなもの一枚である。私はそれで十分満足した。

「昔は熊本の名園、水前寺の清流に自生していました。らん藻類クロオコックス科の淡水藻で、日本特産種です。……：榮養に富み、特にビタミン、カルシウム、鉄分等多く含んで居り、その独特な舌触りと風味は古来より高く評価され、精進料理高級食品として有名であります。」

右の説明書には舌触りと風味とあるが、私は箱をあけて、まずその高い香におどろき、芭蕉の「匂い付」をはじめて体で感じとることができたように思った。

一日がかり

連句に就ての断章

(三)

草間時彦

歌仙一卷、三十六句を巻くのにどれほどの時間がかかるのだらう。人によって違ふし、人数によつても違ふ。わたくしの場合を言ふと、早くとも四時間、つまずき勝だと六時間というところである。三人の膝送りがもっとも早いようである。手だれの人が三、四人集つての興行となると、午后一時に始めて、五時に終るのを目標とするが、はみ出すことが多い。それに、発句が出て、始まる前に三十分ほどは談笑する時間が欲しい。連衆の心を和ますため、仕合の始まる前のウォーミングアップというところである。殊に、初対面の人がいたら、是非とも、この時間が欲しい。それから、満尾したあとに、一卷を振り返る時間が欲しい。酒の入った座や、はしゃぎ過ぎた座の場合、終つたあとで、熱いほうじ茶をいれて貰つて、一刻を過ぎす。酒の強い人にはブランドデーでも差上げてよい。余韻をたのしむのである。そういう時間が持ちたい。

それやこれやを考えると、午后一時に始めても、散会す

るのは夜の七時ごろと予定しなければなるまい。わたくしは時間に制限があつて、追いつてられるような句会は好きでない。仮に連句一卷の完成する時間を六時間とする。六時間とすると、十時開始で四時だ。一時開始なら七時だ。一日がかりとするならば、ちょうどよい時間である。俳句(発句)の会とくらべてみるならば、句会は午后一時から四時、午後六時から九時。連句の会は句会の倍の時間を要することになる。

何故、こんな判りきつたことをくどくどと書いたかという、これだけの時間を前提とすると、現代連句が会場を求めするのに甚だ難儀をしているということを言いたかったのである。

六時間、一つの部屋を専有する。静かであればならない。他から電話などが掛つて来ては困る。隣の部屋の声か

入って来て、心を乱しても困る。交通が便利なところで、部屋代が余り高くないところ。そういう都合のよいところはめったにあるものではない。個人の家のいうことも考えられるが、交通に便利な都心に住んでいる人はそうはいない。わたくしの住居は逗子、東先生のお宅は柏。両者の間は約三時間。そういう点では地方都市に住んでいる人の方が寄り合うのに有利である。

そればかりではない。六時間という時間は勤め人が仕事が終わってから立ち寄るという時間ではない。主婦が昼過ぎから出席して、家族の夕御飯の支度までに帰宅出来る時間でもない。

それで、わたくしは連句は一日がかりの遊びと決めている。時間に追われながら、句を付けて行くというようなことはしない。一日の時間を用意することにしている。

しかし、それはわたくしのような自由な時間を持っている人間だから言えることであって、他人に強要出来るものではない。わたくしは六時間を要するというのが、連句の性格のひとつであると考えている。しかし、三時間ぐらい

で出来れば、それもたのしいだろうと思う。

三時間の連句のために、さまざまなやり方での試みが行われている。一つは半歌仙づつ二日間に分けることだ。このやり方だと、前半の雰囲気の後半につづかないことがある。連続二日間で、泊りこみというようなら気分がつづくが、中に何日も間隔があるといけない。又、二日がかかりだと、座の顔ぶれが一人二人変ってしまうこともある。居ても居なくてもよい人ならばよい。

そうでなくて、手だれの人が一人欠けてしまえば、歌仙の進行の味は明らかに違ってしまう。又、後半から新しい人が加わる場合だってある。同じ顔ぶれだとしても、前半ははしゃいでいた一座が、後半の第二日目では湧かずに沈んでしまうこともある。わたくしは歌仙三十六句は全体で一つの流れのリズムがあつて欲しいと思つている。その点、前半、後半を何日か間を置いて巻く歌仙は、全体の流れがどこか不調和となることが多い。

半歌仙で止めてしまうというのも一つの方法である。半歌仙十八句、表が六句で、裏が十二句。三十六句の場合は

武翁賞

今年度候補作品は左の通りとする。

- 一、昭和五十八年四月より昭和五十九年三月までに作られたもの
- 二、同期間に公表され、あるいは発行所宛に応募されたもの

選考委員

表六句が、その導入部となって、全体のバランスがとれるのであるが、半歌仙十八句で、六句の導入部は長過ぎる。どうしても全体がアンバランスになる。感心出来ない。

俳句の会、つまり句会は現在では三時間か、四時間で終るのが通常である。わたくしは俳句文学館で、いろいろな句会を見ていると、昼の句会はやや、時間がかかる。それでも一時に始めた句会は四時か、四時半に終わっている。夜の句会は六時に始まって、早い会は八時ごろに終わって、そのあと、大久保駅の近くの赤提灯で一杯やっていたりする。二時間と少しで一句会が終るのである。

それでは昔から句会というのはその程度の時間かというところ、そうではなく、五、六時間を要するのが当たり前だったようである。明治から大正にかけての古い俳誌を調べてみると昼過ぎに集って、夜までかかっている。一日がかりだったのである。というのは、当時の句会は席題が中心だった。しかも、一つの題に十句を投ずるのが普通だった。句会に出席して、題を見て、それから十句づつ作る。現代の句会には前以って句を作って置いて、当日持参する。昔は、句会の席上で作った。虚子の俳句散心もそういうやり方だったようである。又、そういう長時間の会合にふさわしい貸席が方々にあった。昔はそれだけ悠長だったのである。現代の句会の会場になる貸室の場合は三時間か四時間が単位で、一日がかりで借りることはなかなか思うようにならない。

句会の場合は投句を持参するという形で、現代にふさわ

しい短時間化に成功している。連句の会の場合はどうすればよいのだろうか。

午後六時から始めて、九時頃には一編の完成した姿を持つ作品が出来上がる。そうするためには三十六句の歌仙は歌仙としてそのままにして、別に短い形式を案出しなければならぬまい。そういう試みは以前から、いろいろと考えられていた。十二句とか、十八句とか、二十句とか、さまざまに短連句が提案され、試みられたいたが、どれも定着しなかった。

結局、三十六句の歌仙の完成した姿に対して見劣りがして、どうにもならないのだろう。歌仙の背後には三百年の伝統がある。伝統に支えられた詩型の恐ろしさが此処にある。

わたくしは連句は「一日がかりの遊び」と大悟徹底して、二時間や三時間の会でまとめるようなことにはしないことにするか、さもなければ三時間でまとめる短い構成を別に考え、それを実作で試みることを提案したい。試みた上で、どうしてもうまくいかなかったならば、仕方がないが、試みる価値はあると思う。

わたくしは、現代の連句が半歌仙で終わったり、半歌仙づつ二日がかりというのに、どうしても賛成出来ない。それは、文芸としての完成美を傷つけるからである。完成美を傷つけずに三時間で終る連句。なんとか考えられないものだろうか。

一座の興

東 明雅

連句は一座の興を催すことが大切である。一座の興とは、連句を興行している間中、捌き手や連衆がみなおもしろさに感動し、思わず時間の経つのも忘れる状態になるを言うのである。連句は一座がおもしろくなければ意味はなく、また、その作品もつまらないものである場合が多い。一座の興と作品の優劣とは、必ずしも正比例するものではない。たとえば一座の興がありすぎて、いわゆるはしゃぎすぎた作品は、その興奮がさめると、反っておぞましいような場合もあるのであるが、逆に言って、一座の興の全くなかった作品には、よいものはあり得ない。そのことは断言できるのであろう。

そこで、一座の興を催すための条件として、その興行の場所・時・構成人員の点検が必要となって来るのである。尤も、連句は志を同じうする仲間とならば、どんな場所、時でもえらばず興に入ることができると言うこともできよう。連句の付合文芸としての原始的形態はその通りである

けれども、今日行なわれている連句の会はそのように単純なものばかりではないので、一応、それらの会の条件について考察してみることにする。

「一座を張行せんと思はば、まづ時分を選び眺望を尋ねべし。雪月の時、花木の砌、時にしたがひて変る姿を見れば、心も内に動き言葉も外にあらはるゝ也。おなじくは、眺望ならびに地景あらん所を選ぶべし。山にも向ひ水にも望み風情をこらす。尤も其の便りあり。稠人（人が多く立てこんでいたり）・広座（座所が広大であったり）・大飲（人がしたたかに酒を飲んでいたり）・荒言（高声でしゃべりちらしているようなところ）の席、ゆめゆめ張行すべからず」とは、連歌道の祖と言われる二条良基（一一三二〇～一三八八）の教えであるが、今日の連句の席にもあてはめて考えることができよう。尤も、連句の月例会などでは、場所が一定して行なわれているところが多く、毎回、景色のよいところを求めるわけにもゆかぬだろう。だから、景

色は二の次としても、稠人・広座・大飲・荒言の席を避け、落ちついた雰囲気で行なうべきだと言うのが原則であろう。尤も、右のうち、大飲・荒言は次の連衆の素質・態度とも深く関連するものである。

連衆については、これも連歌の方の説を引用すれば、宗牧（一四八八—一五四五）の「当風連歌秘事」には、次のように書いてある。「法度・新式をも覚えて、形のごとも句次をやる連衆ばかり八・九人、十人計りを至極と申す也」（嫌物・指合や連歌新式を覚えていて、形式的にも句のつけならびを整えられる作者連衆ばかり八・九人ないしは十人ばかりが最上だと言われている）とあるけれども、これは百韻の場合である。歌仙を中心とする現代の連句においては、連衆が十人もいるのはすこし多すぎる。せいぜい六・七人ぐらいまでが理想ではないだろうか。それは一人平均の句数が、百韻で連衆十人ならば十句であるのに対し、歌仙では三、六句。これではすくなくすぎるであろう。歌仙で六人ならば平均六句になるから、この位が最適で、せいぜい七・八人までであり、それ以上に連衆がふえると、一順も面倒で捌きは苦勞するし、連衆も興味がうせるようである。しかし、宗牧の言うように、連衆の素質が一定している場合、ある程度の修練を積んでいる人ばかりを揃えた時は、捌き手は楽である。

連衆の素質・能力が平均していることは理想ではあるけれども、必ずしも、そのようにはならない場合が多い。この点について二条良基は、「会者、ことに堪能を選ぶべし。

不堪、兩三に過ぎば、まことに難治と可レ謂。但し、初心の人たりといふとも、詞細く具足少なからむ連歌は、一座の妨に及ぶべからず。詞強く景物多き連歌をたびたび返されぬれば、風情を失ひて、更に寄所なし。かやうの人はまことの魔障なるべし。又、異義異端、益なし。いかにも堪能一人の批判をあふぎて、同心の思ひをなすべし。又、善悪黑白を弁へざる者の中には、いかなる上手も連歌の仕にくきなり」（会衆には、特に堪能の人を選ぶべきだ。もし不堪わからずやが二・三人もいたら、まったく処置しないものになる。同じ初心者でも、用語表現が繊細で道具立ての少ない連歌は一座の支障にはならない。用語がぞんざいで道具立ての多い連歌を、再三つき返されると、詩情を失い、前句のより所をさえ見失ってしまう。こんな人は本当の道の妨害者であろう。また同様に異議争論も役に立たない。なんとしても堪能一人の批判を尊重して同調すべきである。また、句の善悪黑白の判断もつかない連衆に交じっては、どんな上手でも連歌はしにくいものである）と述べているのは、現代の連句興行の場合にも、参考になる点が多い。まず、連衆に堪能の人を選ぶというのは当然であろうが、初心の人が加わった場合には、それを捌き手も連衆も暖く迎え、十分に指導してやるべきだろう。また、初心の人はその指導を謙虚に受け、自分勝手な付けをして皆の邪魔にならぬように心掛けるべきである。ましてや、自分の句が付かぬと言って、異議争論に及ぶのは以ての外である。連歌でも連句でも連衆は捌き手を信頼して判断を委

かせるものである。このところをよく弁えないと、一座の精神状態はたちまち不安定となり、一卷を作って行くことが不可能となってしまう。それだけに捌き手の責任は重大なのである。

右の外、連衆の心得として次のような項目が「俳諧独稽古」という本に書かれている。参考のため、列挙して註を加えておこう。

一、出座遅参（席に遅れてやってくる。やむを得ぬ事情があれば別であるが、なるべく遅参しないよう努力すべきであろう）

一、着座品をこゆる（一座の席の上下、これは封建時代と違うから、あまり拘泥しないでよいだろう）

一、難句禁句（誰も分からぬようなむずかしい句や一座にさしさわりのある句は出さぬこと）

一、高吟雑談（大きな声で句を吟じたり、雑談したりするのはやめて貰いたい）

一、隣座の人に囁く（これは捌き手が気になるものである）。

一、貴人或は児同音に吟ずる（これも失礼なこととされている。児は稚児であるが、今なら女性と置きかえてよいところ）

一、自分の句吟ずる講ずる（自分の句を得意になつて吟じたり説明したりする）

一、他の句難じ、況してや他の句を返し自分の句付る（他人の作句を批難し、ましてや他人の句に難癖をつけて

とり消させ、その代わりに自分の句を付ける。こんなあつたましい事はない）

一、他の句前付合趣向を言頭す（他人が付けることになつている時、その付合の趣向を得意になつて説明する）

一、自分の句付さる内座を立つ（これも失礼なこととされた）

一、若輩よりさし合をくる（まだ未熟なものが差合を言い立てる）

一、末座より句数を好、同雪花の句を仕る（末座の者が自分の出句数の多いことを望み、また雪花の句を付けること。今日はこの斟酌は不要、誰でも雪花を付け、句数を好んでよい）

一、睡眠、あくび等（居眠りをしたり、あくびをしたりすることは失礼であるが、そのような一座の雰囲気を作る捌き手の責任でもあろう）

右のように、今日ではもはや時代感覚にあわぬ点もなきにしもあらずであるが、大体は今日の俳席でも通用するのであり、これらが一座の興をさます点を十分に連衆は自戒すべきであらう。

また、捌き手は、なるべく連衆の付句を平均して採用する心がまえが必要であらう。もちろん、才能や経験の差があるから、全く同数というわけにはゆかないけれども、捌き手は常に心を付けて、遅吟の人には督促をし、また初心の人の句は添削して大差のないようにしなければならぬ。いくら熱心の人でも全く自分の句が出ないとすると、退屈

し、やる気を失ってしまうものである。

だから、その為にも、一座には捌き手の外に執筆（はつきり執筆と名をつけないでも、それに類する人）を置いて、捌き手の相談役ともなり、連衆の世話をもさせる方が望ましい。一座の中で老功の人をその役にすれば、その執筆役の人がやがては捌き手（宗匠）となるのであるから、自ら順序をふむことにもなるのである。

捌き手（宗匠）は、捌きの座についたならば、和歌三神を背に負うた気持で、一座の人に対して、全く公正に平等に捌くのが建前である。自己の好悪により偏頗な捌きをすればそれは捌き手の自滅である。よい付句を絶対に見逃さず、すかさず採用する。それができることが、捌き手の權威を高め、信用を博する所以である。

この絶対公正という建前と、なるべく句数を平等にという建前とは全く矛盾するけれども、そこに捌きの難しさが存在する。そしてやはり優先すべきは、絶対公正という原則であろう。先師芦丈翁の捌きの場では、初心者は一句も付かないということがよくあった。今時の人ならば、そのような苦しい試練には耐えられないかも知れない。それほど厳しかったのである。そして、「の」の字が残ったという逸話も残っている。それは初心者の方を何とか一句取りたいと添削されて、結局原句がすっかり変えられ、たまたま「の」の字一つが残ったという笑い話であるが、これが捌き手として苦心された芦丈先生の姿を示すものであろう。最後に一座の興の要素の一つとして、時間の問題を取り

上げてみよう。いろいろの経験から考えて、私は歌仙一卷四時間首尾というのが妥当であろうと思う。それはもっと早く二時間でも三時間でも出来ることはできるけれども、競走ではあるまいし、早ければよいというわけではない。

作品としても十分鑑賞に耐えるものとしては、やはり四時間は必要であらうし、また、せっかくな一座するからには四時間位は楽しむ時間があってよいと思う。

その四時間も始から終まで、のっぺらぼうに使うのではなく、歌仙には表・裏・名残表・名残裏の四部分があるのだから、大体それに次のやうに割りあててやると効率がよい。

一、表六句（三十分）

二、裏十二句（一時間半）

三、名残表十二句（一時間半）

四、名残裏六句（三十分）

簡単に説明をすると、まず表六句のうち、発句は直ちに出来るのが原則である。発句でもたまたましている、膳所における去来のように痛棒を貰う可能性がある。脇句は発句の続きを言えばよいのだから、これもおそらく馴れた連衆なら立ちどころに出来るに違いない。第三の転じだけは難しいから時間はかかるだろうが、よしんば十五分第三にかかったとしても、次の四句目は軽く、月の句は出やすいから、計三十分であげるにはさして難しくはないと思う。表六句は歌仙の入り口、序にあたり、神祇・釈教・恋・無常・地名・人名その他、興味あることは詠むことができない。

だから、一応穏かな表六句を作ればそれでよく、ことに表六句を苦心して盛り上げる必要もなく、盛り上げない方がよいのである。だから三十分という時間は短いかれども、それでも可能なのである。

そして、表で切りつめた時間を裏十二句に一時半をかけ、たっぷりここで楽しんでもらうことにする。さらに名残の表十二句にも一時半を投じる。この二つの部分がいれば一巻のおもしろみの中心であるべきである。だから、極力もり上げて楽しんで貰うことにする。

名残の裏六句ここは急の段にあたる。連句の急の段はおだやかに手際よく結びをつけるわけである。もう、この段になつては曲節を尽す余地はないのであるから、三十分で

よいだろう。尤も、連句は生きものであり、連衆次第、またその日の具合によって、早く進む場合もあれば、もたついてどうしても進まぬ場合もあるものである。かっきり四時間にしろというのではなく、大体そのあたりをめどにしてやることをおすすめているのである。

四時間というものは長いようで短かい。ちょっとでも途中で気を抜くと、ずるずると遅れ伸びてしまう。それがないようにするには捌き手も連衆も精をはりつめ気をこらし、緊張の連続で、居眠りしたり、あくびしたりするひまは勿論ないだろう。そして、この快い緊張感の中に句を作る者も、それを捌くものも、最大の満足感を得る。これが一座の興というものである。

隆盛の兆しの中「連句」2号出る

信濃毎日新聞夕刊58・10・28

雑記帳

連句の雑誌、季刊「連句」の第二号がこのほど発行された。発行人は、東明雅・信大名誉教授で、創刊はことしの六月。

連句は蕉門最後の人といわれた根津芦丈（故人、伊那市生まれ）が、昭和三十三年、連句の専門誌「山襖」を発

刊したものの、衰退していた。しかし、昨今、再び脚光を浴びはじめ、愛好者は今、再び脚光を浴びはじめ、愛好者は全国で千人ほどにふえている。各地の連句会を結んで、昨年は連句懇話会が発足、連句年鑑の刊行など隆盛のきざしにある。

雑誌には、評論や随想とともに、連句会の作品も収録、二十ページの小雑誌ながら、充実した内容となっている。

また、創刊号では、蕪村の「絶頂の城たのもしき若葉かな」を起句に、脇句の投稿を求め、第二号で入選作品を発表。さらに第三号以下も各号で募集して歌仙（「付勝練習歌仙」）を巻くことにしている。さらに、年間ですぐれた歌仙に対して贈る武翁賞（芦丈門人三井武翁氏を記念）を設定している。

絶頂の城たのもしき若葉かな

夏鶯のこだまする溪

第三

治定 枕蚊帳熟寝の夢の安からん
次位 白玉に紅のまじるも楽しんで
佳 水羊羹子供の数に切り分けて
風炉点前正連の客端座して

白緋耳まで似たる親子居て
白緋我子には糊の強からん
緋障子内なる人は絵をかきて
簞枕あさき夢から目が覚めて
帟省の日こよみに赤く書きこみて
籐寝椅子本伏せしままうたたねて
折本のすこし乾反りぬ曝書して
薄ごろも茶筌きびしく廻しゐて
帟省子ら蚊帳にも名残惜しむゐて
湯の香り肌に纏る端居にて
心太突出す鉢の藍呀えて
名代茶屋冷しそうめんうまからん
秋隣り広き机に墨すりて
蛭簞替る替るに顔寄せて
今年酒息もつかずに飲み干して
水団扇遠ちより客の訪ひて
キャンプ村はしゃぐ子の声聞こえきて
鮎を釣る男胸まで瀬にぬれて
志野茶碗涼しき色を手のせて

燕村 正江

櫻晴

貞子

昌子

杉亭

東夷

正雄

あさひ

篤子

孝子

正江

和子

隆秀

啓世

彬風

天留子

美保

てるよ

遊力

明声

麻子

黄夜

「絶頂の城」 付勝練習歌仙

東 明 雅

第三の生命は、丈高いことと、転じがよく利いていることである。発句・脇の張りきった生き生きとした景をどのように転ずるか、この点、たとえば佳作二席目の「風炉点前正連の客端座して」など、夏鶯のこだまする溪に臨んだ茶席の人物を描き、型通りの転じは十分である。しかし、正連とか端座してとかの漢語が絶頂とひびき合せて、完全なる気分の転じが見られない。それにくらべると、佳作一位の水羊羹などは同じ漢語であるけれども平明である。さらに次位の「白玉に……」の句は、色彩感に溢れ、安らいだ気分が文字通り楽しくて、変化という点では十分である。しかし、丈の高さという点からは、やはり、治定した句には及ばないだろう。それは上五で「枕蚊帳」とすっぱり言い切ったところに原因があらうし、熟寝という古語を用いたところにもよるだろう。夏鶯のこだまする溪に面した別荘か旅館かの室内で、遊び疲れた子がぐっすり夢を見ているところである。「らん」という留字が利いている。これなどは、いわゆる百句の中にあってもすぐ第三と見分けのつくものである。白緋の句が二句あったが、耳までは夏鶯

のこだまと近すぎるだろうし、我子の方はやや離れすぎの感がある。このように付味の親疎は微妙であるから、注意されたい。

緞障子の句は形は無難であるが、何か生き生きとした具象性に欠け、箆枕は「あさき夢より目のさめて」とする方が丈高くなる。

それから、帰省子らと今年酒の句は秋季の句となる。もちろん、夏季二句それに秋季を季移りで出し、五句目に月をもってすれば、絶対に悪いわけではない。しかし、この場合の「蚊帳の別れ」と「今年酒」とはやはり「夏鶯」からは離れすぎていると言わねばならないだろう。

繰り返して言うけれども、この作品の配列、佳作二席以

季刊「連句」の創刊に触れて

星野 石雀

句は

よく晴れて風の水の二月かな

林深きに咲きし金縷梅

ふらここに子等の群がり遊ぶらん

畳の縁に拾ふ糸屑

長話ひとりできかす十三夜

蝮蛇の鳴く道ともに行きつつ

中略)

紙幅せまく全部をしるせないが、この巻がここでは最も趣がある。知的遊戯の愉しさを

共感できる。いったい連句はその場に集い、

唱和した者だけの興だけであっていい。所謂

文台おろせば反故という儂さといさぎよさを

下は、決してすぐれたもの順というわけではない。だから、後の方に出ている方も気を落さず、次号にも投句していただきたい。次号の締切は一月二十日である。

次の四句目は、雑で、人情自他どちらでもよい。せっかく家の内に入ったのであるから急に飛び出さないように。

四句目は、むかしより四句目ぶりというて、やすくかるきをよしとす。師のいはく「おもきは四句目の体にあらず。脇にひとし。句中に作をせず」と也。古事、本説など嫌ふことも也。「春秋の季つづき、四句目にて花・月の句をする事、かならず有まじ」との師説也。

(三冊子)

兼ねたあそびだから、これを活字にしても第

三者の鑑賞に耐える出来ばえのものほそうざ

らにありはしない。

私は野村牛耳門の端しっこだが、いろいろ

なときに牛耳翁の教えが蘇ってくる。そして

連句はむつかしい。捌きの美意識をしゃにむ

に通していた頃のわが若さ、あさはかさを恥

じてもいる。それだけにこの誌面に窺われる

明雅氏の懇切な指導ぶりを尊いと思うし、こ

の季刊誌の発展を祈る次第である。

(「花実」62号)

芭蕉翁参百回忌取越し追善歌仙興行

恒例の「俳諧芭蕉忌」を十月十九日　るが、先例もあることとて、取越して　四歌仙を収録する。

(水) 深川芭蕉記念館で開催した。　三百回忌とした。参加者廿五名。

今年芭蕉翁没後二百九十年にあつた　左記に当日の東明雅先生の講話と作品

(猫蓑会　幹事)

昭和枯尾花

東　明雅

芭蕉の臨終は元禄七年(一六九四)十月十二日申の刻(午後四時ごろ)であった。その模様は其角の「枯尾花」所収の「芭蕉翁終焉記」・支考の「笈日記」・路通の「芭蕉翁行状記」などにくわしい。さらに近頃になってその支考の「笈日記」に書かれた前後日記の稿本が出現し、それによって「笈日記」以上に詳しく芭蕉の臨終とその前後の様子を知ることができるようになった。「芭蕉翁追善之日記」というこの本は、未刊連歌俳諧資料第三輯2(昭和三十四年刊)の岡田利兵衛氏の解説によれば、西讃観音寺に近い

託間の俳人森安華石氏が、道で反古紙屑を積んだ大八車の中から偶然探し出されたものを岡田氏が譲り受けられたものであるという。この書はことに、芭蕉歿後の供養のさまについてくわしい。十月十八日は初七日、この日、「なきがらを笠に隠すや枯尾花」という其角の悼句を発句にして百韻の興行があった。二十七日は廿五日で、この日芭蕉の墓が建てられた。このこと「笈日記」では十八日に建てられたように記載されているが、これはやはり「芭蕉翁追善之日記」の記載に従うべきだろう。三七日は十一月二日、四

七日は十一月九日、五七日は十一月十六日、六七日は二十三日、そして七七日が十一月三十日、支考はそれぞれの忌日を修し、最後に、「そも今宵は中陰の名残とて人々あつまりて牌前の別をおしむに、明日はさらに武江の雲にも行あるいは湖南の月にも帰りてその人々のあはれをも見給へかし。さらぬやしまの外もこゝに逢ひかしにも見せられて、花ともひらき葉ともちりぬべし。かならず風雅のいつはらぬものを守り給へとて、今宵は夜すがらまほろしのわかれをそなし奉りける。元禄甲戌七年十一月晦日」と記している。

このように、俳祖芭蕉の忌を修し、「かならず風雅のいつはらぬものを守り給へ」と祈る行事は年ごとに行なわれたが、やがて、芭蕉は偶像化され、各地に翁塚の建立が相つぐようになり、それが段々と盛大になって来たのは芭蕉七十回忌、宝暦十三年（一七六三）あたりからであったと思われる。

この風潮は次の文化・文政期になると、一段とエスカレートする。寛政五年（一七九三）は芭蕉の百回忌にあつたが、全国各地で一斉に追善供養が行なわれ、俳壇は芭蕉崇拜で湧き返った。この年四月、近江義仲寺で百回忌法要を修するにあたり、当時和歌の家元であった二条家からは芭蕉に対し「正風宗師」という贈号を賜わり、追善の発句が寄せられた。またこれに先立ち天明三年（一七八三）三月には、加藤晧台主催の芭蕉百回忌取越し追善俳諧が興行され、この席には与謝蕪村も出席しているが、これは取越

し追善俳諧興行の嚆矢をなすものであろう。

天保十四年（一八四三）は百五十回忌にあたり、この年もいろいろな行事が行なわれたようである。二条家からは「花本大明神」の神号が授与されたという。架蔵の「芭蕉翁図」一幅もその記念に作られたもので、讚に「皇和天保十四癸卯、今年蕉翁一百五十回にあたるるとて此御影をもとめ、そのよしをうつせるといふ鶯吟亭文山のもとめにより謹て筆をとる、龍鳴館のあるし士芳」として、「はつしぐれ猿もこみのをほしげなり」という翁の一句が録されている。鶯吟亭文山も龍鳴館士芳も有名な俳諧師ではない。しかし、このような人たちが挙って百五十回忌追善俳諧興行したあとを偲ばせる貴重な資料である。

二百回忌は明治二十六年に当たる。これに先立ち、明治二十年五月、東京の俳諧宗匠の第一人者と目されていた其角堂八世永機は、門人巽離庵婦一に其角堂九世を譲った。その嗣号譲渡金は三百円であったというが、明治二十年の三百円と言えば大変な高額の金子である。永機はその後、北陸路を廻り、十一月近江に入り、同月二十日から七日間にわたって粟津義仲寺で取越し二百年法要をいとんだ。永機は東京から法要に馳せ参じた機一に対し、「お前のあの金はすっかりこゝで使いはたすつもりだよ」と言っただうだが、法要の費用は、京阪から集った俳人たちが分担し、永機には一文の負担もかけずに終った。

法要は十一月二十六日が旧暦十月十二日で芭蕉忌正当の忌日となった。追善の百韻一卷は「枯れて後尾花にかゝる

雲もなし」という永機の句を立句に、正式の文台を立てて、永機と梅年が正副宗匠の座につき、執筆が機一・菟好交替で勤め、百韻一卷を芭蕉碑前に手向けたのであった。

作者は機一・詢堯・菟好・磊山・静和・正義・機春・梅年・乍昔など一人一句で続き、三升（九代目市川団十郎）・梅幸（五代目尾上菊五郎）などの名も見られ、これらは誰かが代作したものであるにしても、流石に豪華ですばらしい芭蕉忌法要であった。

この法要のあと、明治二十六年に永機は、其角の「枯尾花」に倣って「明治枯尾花」を出版したが、それが二百年正当を期してのことであることは勿論である。

だが、皮肉なことには、この明治二十六年という年は、正岡子規が「芭蕉雑談」を「日本」誌上に発表して、偶像化され神格化された芭蕉を打ちくだし、「発句は文学なり連俳（連句）は文学に非ず」と宣言した年でもあった。子規のこの「連俳非文学論」は、彼の連句に対する知識・経験の乏しさによる理論的欠陥を持っているものの、彼と同じく知識・経験の乏しい大衆に対しては、一応の説得力を持っていたし、ことに子規は発表機関として新聞や雑誌を持ち、ジャーナリズムに乗っていただけにその影響は大であった。この「連俳非文学論」が唯一の原因ではないけれども、明治以後の社会・文学の風潮は次第に連句を拒否するようになって来る。

芭蕉二百五十年忌にあたった昭和十八年（一九四三）は、日本は太平洋戦争もそろそろ敗色の濃い時期であった。当

時、日本文学報国会なるものが作られていて、そのお声がかかりで一応盛大な芭蕉追善の行事が行なわれた。そしてそれを機に、連句に「昭和俳諧式目」なるものが作られている。私はこの式目を誰が作ったのか知らない。しかしながら、その内容と解説を読んでも、さらにそれをもとにした実作を読んでも、一向に俳諧の神髓にふれたものを感じられないのが遺憾である。このような式目が、お上で作られこれを守るように強制されたところに、芭蕉死後二百五十年にして、彼の芸術の中心たる連句は滅亡寸前であったと言うべきであろう。

しかしながら、連句は不死鳥のように生きかえった。近ごろ、ことに昭和五十年以降は相つぐ入門書の出版、各地における連句会の誕生、昨年はまた連句懇話会の結成、連句年鑑の発刊など、まさに連句の復活を実証したものと云えよう。それは皆我々の先祖の残してくれた貴重な文化遺産を守ろうとする人々の努力の賜物であり、明治維新以後百数十年に及ぶ西洋文化一辺倒の反省のあらわれでもあるが、一つには「風雅のいつはらぬもの」を守り給うた芭蕉翁の力による事も忘れてはならぬところであろう。いま、私たちが正当の三百回忌を取越して、今年の秋に追善俳諧を興行したのも、まさにこの芭蕉翁の心に報いるためであった。私どもは風雅のいつわらぬものを求めて、日々精進して来ている。在天の芭蕉翁はきっと永く私どもの連句を守って下さるだろう。

協起歌仙「枯野」 捌 東 明雅

卒業歌うしろの母も和し歌ふ

工場の油煙吹きこむる窓

退職は釈迦に説法ブイとやめ

簞笥の貯金暗算をする

家土産に鮎折を提げ霜の道

翁 明雅 タンホイザーの路地にひびきて

正江 くねらしてヨガの技法が迫り来る

和子 明けて知ったる嫁の近眼

甲子郎 玄米と有機野菜の自然食

杉亭 座敷童子の頬ふっくらと

あかり つくばぬの水掬む月光散らしつつ

同 木の突つばむ掠鳥を追ふ

和 薄紅葉名入り手拭干してあり

江 どうする連の老いが目立ちぬ

和 転勤を重ねて早も二男二女

亭 奥州仙台孫太郎虫

和 満開の花に俳諧浄土あり

和 苦菜心に逃水を追ふ

郎 秋元正江・式田和子・佐藤甲子郎

江 杉江杉亭・中田あかり・竹内テル

同 胡葱臙神に供へて

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

枕にかよふ鳴き残る虫

冬の梨影のほかに盛られるて

溜したみ酒呑む人忍び足

はらからの集へりこの月いかにせん

夜寒の軒に小猫一匹

落鮎ウの命あはれと思ひつつ

ばっさりと切る長き黒髪

禊する白衣の女の乳豊か

粥煮えそめしゆきひらの蓋

減税という口の下増税も

吾は関せず紅旗征戎

月寒し月の都の人見たし

あっち向いてホイと遊ぶ子供ら

おしん乗せ筏の下る最上川

村の長者の土蔵真白し

花散るや翁となりて舞ひ出づる

十月十九日、深川芭蕉記念館は秋雨に煙っていた。

この日、恒例の猫養会は芭蕉三百回忌超越追善歌仙を興行した。

定刻午後一時、東明雅先生を初め連衆二十五名が参集し、四席に分れて協起歌仙を巻いた。起句には芭蕉の辞世の句とも言ふべき

「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」が選ばれた。

井本農一氏の本によれば「この句は芭蕉の亡くなる四日前の旧曆十月八日の深更午前二時ごろ看病中の吞舟といふ門人に墨を磨らせ

て『病中吟』と前書をつけて書かせたもので、芭蕉の最後の創作とも言へるものであった」と。

起句が「旅、病む、夢」と難題を抱へた重苦しいものだけに、各席の捌きが脇句でどう受け止めて

連衆が第三以下でどう展開させて行くか、興味深々とした張行であった。

苦吟三時間余、漸く一卷を巻き上げて、夕闇の中で記念館を後にした時も、秋雨は小止みなく降り

続いていた。(杉江杉亭)

脇起歌仙「枯野」

捌 馬場東夷

ナオ

護摩たいて堂内しんと空王海忌

柱時計ののんびりと鳴る

父と娘で刷毛目天目ほめあひて

鬢に白髪のちらほらと見ゆ

翁 ライオンと巨人のゲーム間近なる

東夷 ほかほか弁当おせんキヤラメル

和代 避暑の宿バンジョーおろし弾き始め

遊 逢瀬うれしく長き夕立

隆秀 泣きまねが本泣きになりなだめかね

篤子 舞台の袖に息をひそめて

世 寝待月過ぎて添ひ寝の猫のひげ

遊 黄泉もかくやと霧ふかき夜

代 菊人形肩のあたりの咲き遅れ

世 真澄の絵観てめぐるみちのく

篤 駐在の浜に貝殻拾ひをる

秀 幻のごと蜃気楼消ゆ

遊 懐しきワルツ流れる花の奥

代 御機嫌ようど蝶とたはむれ

世 歌川和代・雑賀遊・福井隆秀

篤 穴沢篤子・中島啓世

秀 新入生帽子光らせ花の校庭

篤 くるくるまはす春の日傘を

芭蕉三百回忌記念の歌仙張行は如何にもそれにふさわしい冷たい雨の中、芭蕉記念館に於て催された。陰気な立句を生かした見事な脇にそられて、たちまちひしめいた第三の中から、ガラーと転じた和代さんの句が選ばれる。

月の坂を行く男、穴に入る蛇、とトント運んでどちらよりも早く表六句が終り早速お酒が配られた。生酒「信濃錦」に陶然としつつ裏へ。達者過ぎて？滑り勝ちな面々に、捌はしきりに「抑えて」をくり返し、そのせいか、恋はあつけない程温和しくオトメチックに通過。「シャブリを抜いて」に至り、啓世さんが「プロヴァンス」の句を寄せ「ラ・トラビヤタ」の一節を口ずさむ。お酒も効いて一同浮き立って日傘を廻し乍らナオへ。釈教を護摩に求め洩く滑り出たナオは、天目茶碗に見入る父娘、その父の頭から球界の監督へ、そして避暑地の霧の中へ。花のワルツから御機嫌ようどと気取って満尾となったが、日頃活発な連中が、至極おっとりとした終始したのも敵愾な立句に強く影響されての挙句と推測する次第。

(雑賀 遊)

脇起歌仙「枯野」 捌 坂本孝子

ナオ

種播くも播かる土も暖く

体外受精の嬰を抱きにけり

黄金のジバング二十一世紀

ブラックホールに吸込まれつつ

酔ひ痴れる海の男の潮の香に

浴衣の肌は汗でじっとり

常夏の塵を払ひて待つ今宵

いつもの乞食地下道の隅

聞えない振りして守る老の身を

人間万事雨天順延

月の夜は月うつくしとひた走る

破れ蓮に来て破れ蓮を見ず

嗚ひとつ社の千木によく喋り

勤め帰りのやや寒き頃

次つぎに戸棚の整理はかどりぬ

万古の急須口の欠けたる

皆笑ふ写真御室の花見にて

指さす方に遊ぶ蝶々

馬場彬風・大窪瑞枝・副島久美子

秀島みき・山口みづゑ

風

紅緒の草履かけるふの中

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

時雨やさしく濡らしゆく玻璃

干大根手毬つく子の唄ひるて

ズボンの裾にじゃれる黒猫

いく度も確かめに出る十三夜

小豆煮る香のこもる横丁

乱れ菊歩める軍鶏の胸高に

例の電話は九時に必ず

辞書置いてそと取りをく彼の席

細巻たばこふかす髭面

青すだれ透すかぜあり隅田川

草の根かはく塚の小さき

月影は冷え冷えとして酒熱く

風邪の心地のいつか抜けをり

久々の筆にかけたる直木賞

落人の舞のこる利賀村

見晴しへ登りつめれば花吹雪

同

私達の座は捌きも連衆もたおやかな

(?)女ばかりの中に頼もしい男性の

彬風さんが参加されました。

「夢は枯野」の発句、降り出した雨

に時雨思らしいしつとりした脇・受けて

立つ第三は明るい転じて軽く表は終

了。

真、共学の幼い恋から梅若の傍、直

木賞に平家の落人部落と面白い付が出

て盛上って来ました。

名残の恋は海の男、源氏、古今を偲

ぶ雅びやかな女性と正に彬風さんの世

界、之を旨く女性が受けてさまざまな

現代風俗を展開、一卷の山場となりま

した。老人のあきらめムードも面白く、

月下のジョギングでナウにすべり込み

花も挙句も軽やかに満尾となりました。

因みに捌きの孝子さんの落付いて居

られたこと!!付味、転じは言うまでも

なく全体の流れにも気を配って適切な

句を適時に拾い上げていたゞ彬風さん

初め女性の句もその人らしい個性の

ある一卷となりました。

(山口みづゑ)

脇起歌仙「枯野」 捌 吉沢てるよ

ナオ
永き日の峠越ゆれば過疎の村
間のびのしたる鶏のこえ

我慢我慢おしん中曾根平社員

縁切寺に婆がかかけこみ

翁 上呂下呂中呂もありて岐阜いで湯

家紋の火鉢かざりおくだけ

貞子 渡されし不倫の文にとつおいつ

正雄 姦通罪は昔語りに

麻子 一葉の実らぬ恋に泣く芝居

弘子 駄菓子子の売場デパートにあり

司 出迎へに月ついで来る駅の道

麻 刈りとりし稲かかへゆくひと

弘^{ナウ} ななかまど燃えたつときのみじかくて

司 ちいさく見ゆるビルよりの富士

麻 現し世につけし足跡ふりかへる

貞 稲荷にひとり男詣でて

正 花吹雪散りやまずして青き湖

司 雲雀の鳴く音遠くきこゆる

正 米谷貞子・氏原正雄・内田麻子

麻 市野沢弘子・杉内徒司

貞

正

芭蕉の「さび」の究極的とも言うべき句を立句にしての、芭蕉三百回忌に参加できた喜びをかみしめつゝ連衆の一人となりました。

何時もは無表情な隅田川に、秋雨が降り続き、波間には都鳥がたゆたい、窓には芭蕉ゆかりの木々の葉がゆれ、すべてが思いが芭蕉へとつながってゆく。この日ばかりは美味な地酒にも目もくれず、ひたすら芭蕉の世界へと入って行きました。表六句が滞りなく終る頃には、初めの頃の緊張も解け、次々と個性的な句がとび出し、特に、

虫聞きて手持無沙汰の占師 徒司
猫より他は入れぬ邸宅 麻子

月出でて夏大川の橋に立ち
四股名めく名の多き日本酒
実刑に服しかねたる元首相
猫より他は入れぬ邸宅
園遊会花の糸垂る東屋に
高坏据ゑて飾る菱餅

などの句に一同「うーん」とうなり合
い、今更のように連句のすばらしさに
魅せられました。

(市野沢弘子)

雁帛往來

▼「行く秋」（創刊号19頁）の解説に

濡れそぼつかさねの色は水浅黄 遊
の「かさね」を、それ迄に妖怪がなかつたものだから、てっきり「累」と思い込み、恋と妖しさの絶妙さに敬服などと書いてしまいました。かさねは襲で、平安朝の女官のムードを思い浮べるところでした。

（東京都 福井隆秀）

▽吉沢てるよ女史の世話により「さざなみ連句会」（会員十二名会場・小田急「百合ヶ丘」駅前多摩農協二階）が明雅主宰を迎へて十月八日発足、「秋鱒」を首尾した。左はその半歌仙。

秋鱒の一塩届く八瀬泊り
山の端そめて出づる名月
飾り窓盡に芒の活けられて
正座の膝を崩しくつろぐ
やうやくに夏期研修の終りたる
電燈めがけ蟬の飛びこみ

古 畦 明 雅
て る よ 史 会
吳 天 会

僧乗りて自転車が来る闇の道

暴走族は女番長

鱒曳の忍べど声にあらはれぬ

ライター擦って腕時計見る

予知なしに大爆発の三宅島

雨だのみなる町のあけくれ

冷ゆる手をさすり見上ぐる宵の月

芭蕉忌修す高石神社に

濡縁に今日も顔出す迷ひ猫

男世帯の荒き開けたて

一族の打ち揃ひたる花の宴

季も身もうらら思ふことなし

美智子

たかし

みどり

天

よ

多磨女

さだ子

徒 司

さだ子

女

し

連句会案内

。A・C・Cゼミナール

日時 第二・四水曜午後一時―三時

会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャアセンタ―

新宿区西新宿二ノ六ノ一

（電）三四四―一九四一（代表）

入会金 五千元

受講料 一万八千三百円（十回）

。連句教室 会費千円

日時 第一日曜日午後一時―六時

会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ十一ノ三
（電）九四一―一四四五

季刊「連句」第三号 定価五〇〇円

発行 誌代 年二〇〇〇円（送共）

発行 昭和五十八年十二月一日

編集人 杉 内 徒 司

発行人 東 明 雅

発行所 季刊「連句」発行所

柏市つくしが丘二ノ二ノ二二

電話〇四七―一七五―一七五二

振替口座東京七七一五二二三三

